

# Civi-note

36

し び の 一 と

高松市美術館  
ボランティア通信  
2018年4月1日 発行

## 誌上ギャラリートーク



### 「京都市美術館名品展 京の美人画100年の系譜」

2018年4月21日[土]～6月3日[日]

この春、明治・大正・昭和の日本画家が描いた約70点もの京の美人画が、高松市美術館に一堂に並びます。美人画と一口に言っても、その画題は実に様々です。美人画の大家として知られる上村松園の《人生の花》(1899)には、式場に向かう黒振袖の花嫁と、先導する母親が描かれています。松園は婚礼の風俗を再現し、当時の着付けや着物の柄、髪型や化粧などがよく分かり、見ていてとても楽しめます。また、橋本関雪の《長恨歌》(1929)のように中国の文学を題材として、そこに登場する楊貴妃の姿を描いた作品もあれば、梶原緋佐子《暮れゆく停留所》(1918)のように、日常の暮らしを営むあるがままの姿をテーマにして、仕事に疲れて椅子にへたりこむ女性を描いている作品もあります。そして、大正から昭和にかけての時代を反映したモダンガールや、チマチョゴリを着た朝鮮の女性、また、舞妓や太夫、白川女など、京ならではの華やかな女性像を描いた作品も展示されています。

京都市美術館が所蔵する美人画の名品を集めたこの展覧会は、京都市美術館がリニューアル工事中の今だからこそ実現できました。普段は京都まで行かなければ見られない作品を鑑賞できるまたとない機会です。是非、美人画の世界を堪能しに来てください。

[谷口史子]



菊池契月《少女》1932年 京都市美術館蔵

### 第1期常設展 展示室1「かわる、かたち」／展示室2「素地で楽しむ漆」

2018年4月10日[火]～6月24日[日]



岩崎貴宏《Out of Disorder (Snow Mountain)》2010年  
Courtesy of URANO 高松市美術館蔵

2018年度最初の常設展では、作品の素材に注目して、高松市美術館の所蔵品を紹介します。

展示室1では「かわる、かたち」をテーマに、2017年度新収蔵作品を含んだ現代美術作品を展示。岩崎貴宏(1975-)の《Out of Disorder (Snow Mountain)》は、レースカーテンから糸を引出し小さな鉄塔を作り出した作品で、それにより無造作に置かれたレースカーテンがまるで雪山のようにも見えてきます。

現代美術作品には、それまで画材とされなかった様々な素材が多く見られ、どのような材料を使うか、ということが作品に意味を与えることもあります。作品の素材と、それぞれの作家によって変えられたその形をご覧ください。

展示室2では「素地で楽しむ漆」をテーマに讃岐漆芸の作品を展示。太田備(1931-)は、籃胎という細く裂いた竹を編んで作った器を素地とした作品を多く制作しています。《籃胎箱 波文》(1989)は、竹の網目を波の模様のように見せています。磯井正美(1926-)の《捲胎蒔罫 雲気文 花瓶》(1963)は、テープ状のボール紙を素地としています。

漆を施す前の素材である素地には、木材の他、竹や紙、陶器や金属などが使われてきました。漆で様々な図案や模様が施された表面とともに、その下地となる素材に注目して、讃岐漆芸の美と技術をお楽しみください。

[高松市美術館 石田智子]



太田備《籃胎箱 波文》1989年 高松市美術館蔵



## 高松市塩江美術館の楽しみ方!

塩江美術館、一度は行ってみたい美術館!

高松市の南に位置する自然に囲まれた塩江美術館では、毎年香川県内をはじめ近隣の注目作家を紹介している企画展覧会や所蔵作品を紹介する常設展覧会が、随時開催されています。また、館に隣接する陶芸館では、陶芸用の窯が整備されており、土と触れ合えることもこの美術館の魅力のひとつになっています。

しかし、塩江美術館の魅力はそれだけではありません。展示室から一步外へ出ると自然に囲まれた四季折々の風景や草花の香りを楽しめます。

春には桜並木、夏にはほたる鑑賞、秋には紅葉、冬には雪景色と様々な四季を味わうことが出来ます。



〈春〉



〈夏〉

また、美術館の庭園では県内彫刻家の野外彫刻を鑑賞できるのも魅力です。そして周辺には、地元の団体の協力により「句碑の道」が整備されており、現代俳句に業績を残した金子兜太や物理学者であり俳人でもある有馬朗人などが塩江を詠んだ句碑の散策もおおすすめです。

塩江は、塩江美術館、四季折々の自然といった様々な場所で、「美」を楽しめる地域です。



塩江美術館展示室

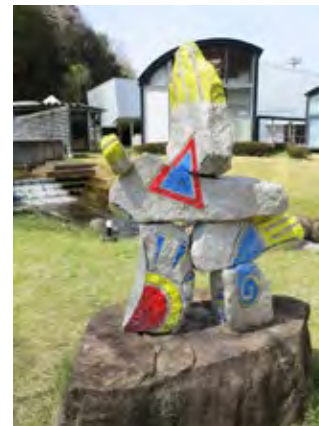


〈秋〉



〈冬〉

これから暖かくなりお出かけしたくなる季節になります。是非、「美」を探しに足を運んでみてはいかがでしょうか! [高松市塩江美術館 三宅靖之]



アキホタタ《Paradise Wind (楽園の風)》  
1996年 塩江美術館蔵



金子兜太 句碑



有馬朗人 句碑

## 編集後記

◎人生の節目において、神社やお寺で気軽に受け取れるお守りは心強い味方です。お守りが流行り出したのは平安時代からだとか。徳の高い神様は喧嘩をされないそうで、複数のお守りを一緒に持っても大丈夫と知り安心した私です。 [佐々木真理子]

◎"月づきに美しき景色あるけれど 心待つのは 桜咲く月"このciviのひとが皆様のお手元に届く頃でしょうか。 [鈴木典子]

◎ソチ五輪の代表から落選しリンク裏で泣いた高木美帆選手が平昌で銀メダル! もらい泣きしながらの夜な夜なのTV観戦に、寝不足気味のこのごろです。 [高木由貴子]

◎美術館ボランティアを始めて2年になります。ギャラリートークはわかりやすくといつも心がけていますが、まだまだです。 [谷口史子]

◎桜を見上げるのが好きです。桜を見上げる人を見るのも好きです。 [高松市美術館 橋美貴]

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL: 087-823-1711 FAX: 087-851-7250  
発行: 高松市美術館 編集: civi & 橋美貴(高松市美術館) デザイン: 福田千恵(高松市美術館)

《モウソウチク》橋本雅也

この度、高松市美術館のコレクションに新しく10点の作品が仲間入りしました。ここではその中から橋本雅也《モウソウチク》(2014)をご紹介します。

竹の枝が風に揺れ、たなびく姿。モウソウチク(孟宗竹)とは中国原産の竹で種名は三国時代の呉の人物、孟宗にちなむものです。静かに見ていると目の前にあるモウソウチクが作品であることを忘れ、思わず手を伸ばして触れたいくなります。最も日本的な美がそこにあるようです。ですが、この彫刻作品が鹿の骨で出来ていると知った時、私の中で戸惑いとためらいの感情が生まれました。そして見入ってしまう。

作者の橋本雅也さんは1978年岐阜県高山市生まれ。今注目の作家で、彫刻は独学で学びました。猟師の鹿狩りに同行した経験から、鹿の骨や角から植物を彫り出すようになります。

この作品はその鹿狩りに同行後、同じ山で自然死した鹿を見つけたことに由来します。その場所は風の吹き抜ける気持ちのよい場所で、鹿が自ら死に場所を選んだように思えたそうです。その1年後、同じ場所で鹿が白骨化しているのを見つけました。

その骨から彫り出されたのがこの作品です。彼にとって鹿の骨や角から植物を彫ることは生命の痕跡を引き出すことだそうです。

そのような生の痕跡を追う作品において、この作品は生きとし生けるすべてのものが繰り返す生と死の営みの中で、いつか必ず訪れる死の部分も静かに語りかけてくる気がしました。

橋本さんが創り出す白色の幽遠な作品世界。改めて、竹の葉が風にたなびく姿の中に、山中で橋本さんが感じたのと同じ風の形を見た思いです。



橋本雅也《モウソウチク》2014年  
photography by Tadayuki Minamoto

【佐々木真理子】

その他の2017年度新収蔵コレクション(一部)



小野耕石《Inducer.03》2016年  
撮影：青地大輔



南条嘉毅《羅城門》2017年  
撮影：青地大輔



稲崎栄利子《雄鳥》2005年  
撮影：高橋章



北原千鹿《漆 彩色銀 洋酒壺》昭和初期  
撮影：青地大輔

(全て高松市美術館蔵)

わき役のひとりごと 第9回

ルノワール《シャルパンティエ夫人と子どもたち》

印象派の画家として有名なルノワールが37歳の時、パリの出版業者にして美術収集家のジョルジュ・シャルパンティエ氏より依頼され制作したのがこの作品です。

大邸宅の一室に浮世絵や屏風など、家具調品は流行の東洋趣味にあふれた物が揃います。その中で今回、竹素材の椅子である私がご案内を務めます。

シャルパンティエ夫人のドレスは最新流行色の黒。彼女はパリ社交界の花形であり、ルノワールを夫ともども支援していました。くつろいだ様子で寝そべる大型犬は当時のステイタスシンボルです。そして、真ん中にちよこんと座っている愛くるしい子どもたち。

姉とお揃いの淡いブルーに白いリボンやレースがアレンジされた可愛いワンピースを着ている子どもは妹？と思いましたが、実は弟なんです！フランスに限らず何世紀も前から男児には3・4歳頃まで少女服を着せる風習が続いていたそう。椅子の私には分からぬことですが、なにやら人の世界では昔から女児より男児の死亡率が高く、一種の魔除けの意味があったようです。したがって、この作品は母と娘と息子の肖像です。もちろん作品の出来栄に夫妻は大変喜びます。



オーギュスト・ルノワール  
《シャルパンティエ夫人と子どもたち》  
1878年 メトロポリタン美術館蔵

パトロンのお陰もあり、この絵はルノワール初期の代表作の一つになりました。そして世間に認められ、彼の後半生は作品が飛ぶように売れたのです。

では、名士であるシャルパンティエ家のその後が気になります。実は、ルノワールが鉛筆をふるったこの頃がシャルパンティエ出版社の最盛期。その後、出版社の名前は消えてしまいます。人の世は儚いものですね。

しかし、ルノワールの鉛筆により母と子の幸せは永遠の命を与えられる形で作品として残されました。

【佐々木真理子】

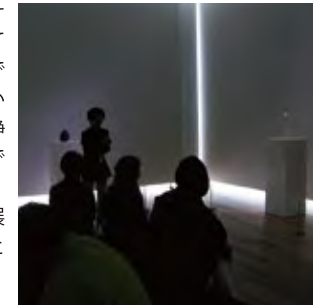
10/22[日]~11/26[日] ギャラリートーク

特別展「高松コンテンポラリーアート・アニヴァーサリー vol.06 - 物語る物質」

2009年にスタートし、今年で7回目を迎えた、年に一度の現代アートのグループ展。今回は6人の作家を紹介しました。テーマは「物語る物質」—6人の作家達はいろいろな素材を使って、このタイトルにふさわしい作品を見せてくれました。ある作品は楽しげに、またある作品は強く…。

その中のひとり橋本雅也さんの鹿の骨で彫ったソメイヨシノの作品は、静かで、そして情感豊かな作品です。橋本さんは、独学で彫刻を学び、寺守をしながら制作をしています。その寺には水仙や桜の花が咲くそうです。友人の猟師と鹿狩りに出かけ、大きな衝撃を受けたことから、鹿の骨を彫るようになったといいます。橋本さんの展示室はとて暗く、照明を極限まで落としています。ほんのわずかな光は、隣の展示室から漏れてくる明かりだけ…そのうす明かりの中に一枝のソメイヨシノがぼんやりと浮かびます。それはまだ肌寒い春の宵、夜桜を見ているようなそんな感じです。ここでは私のギャラリートークの言葉はいらぬと感じるほど。お客さんも静かに鑑賞されている様子が印象的でした。

今回のコンテンポラリーアート展は、私にとっても忘れえぬ展覧会となりました。 [鈴木典子]



11/26[日]  
「亀井洋一郎ワークショップ つぶすかたち レリーフをつくろう！」  
(高松コンテンポラリーアート・アニヴァーサリー vol.06)

参加

このワークショップはお手伝いではなく参加して焼き物作品を作りました。講師はアニヴァーサリー vol.06 展出品作家の亀井洋一郎さんです。粘土に触る、形を作るといのは大人になっても楽しいものです。

手のひらで粘土をつぶしたり押さえたりして土台を作り、柔らかい表面に道具を押し付けて丸、三角、四角と模様をつけ「つぶすかたち」が出来ました。焼き物作品はこの後、焼成されてから手元に届きました。

手元に届いた作品は、釉薬がかけられて淡く青白く柔らかく光っていました。この色は亀井さんの作品「Lattice receptacle」と同じ釉薬！と思うと少し(ほんの少しです)作家に近づけた気になりました。

【三好ひさこ】



1/28[日]  
「平川めぐみワークショップ なりたいじぶんになる ヘンテコ・ファッションショー！」

アシスタント



「なりたいじぶん。じぶんじゃないじぶん。ヘンテコファッションショーでそんなじぶんをみせてみよう。」

軽快な音楽が流れミラーボールが回り、自分が作った衣装を着てランウェイ(12mあったそうです)を歩きます。この日のワークショップは衣装の制作だけでなく、ファッションショーまで演出しました。講師の平川めぐみさんは演劇の舞台衣装を作っています。(カタタチサト ソロ公演「めぐみぬち」(2017/5/19)の衣装などを担当されています。私も見に行きました。)

当日の平川さんは黒髪でドレッドヘア！…かと思いきや実はショートヘア。黒髪をよくみると割いた黒い布で作った帽子のような？かつらのような？被り物でした。ちょっとしたアイデアで、「じぶんじゃないじぶん」になれそうです。さて自分をかっこ良くみせようか、強く見せるか、それとも人間とは別のものになるか…。

【三好ひさこ】

9/9[土]~10/15[日] ギャラリートーク

特別展「没後45年 鏑木清方展」

平成29年が清方没後45年となるのを機に、50点ほどの作品を通して画業をあらためて振り返る展覧会でした。1章には大作が並び、中でも特に来場者の目を捕らえたのは華やかな《嫁ぐ人》、そして代表作のひとつでもある《朝涼》。続く2章には親密で濃い世界を見せてくれる「卓上芸術」が展開されていました。清方が傾倒していた夭逝の作家、樋口一葉の『たけくらべ』の美登利、この魅力あふれるヒロインを、何度描いたかわからない、と清方は語ります。また深い交流のあった泉鏡花の作品の挿絵など、文学好きにはたまらないラインナップで、あるお客様は物語挿絵に長時間見入るあまり「脚が痛くなったわ」と苦笑されていました。3章では美人画や風俗画が展開され、正確な時代考証のもとに描かれたこれらの作品は、清方著『こしかたの記』とともに当時の文化、生活様式を知ることができる貴重な資料となっています。

年齢問わず、皆さんが清方作品を楽しんでいるようすが印象的な楽しいギャラリートークでした。

【高木由貴子】



10/20[金], 11/27[月]  
「高本敦基 作業手伝い」  
(高松コンテンポラリーアート・アニヴァーサリー vol.06)

アシスタント

79594 ——この数字はいったい何？と思われたでしょう。この数字は高松コンテンポラリーアート・アニヴァーサリー vol.06の出品作家のひとり、高本敦基さんが、展示作品のために使った洗濯バサミ数です。そして、高松市の19歳以下の人口でもあります。今回は、高さ、そして使った洗濯バサミの数とともに、彼の作品の中で最大になりました。私達にとってはとても日常的で、ひとつひとつは小さな洗濯バサミ。それを連結させ、圧倒させる程の作品になっていく過程を現場で見たくて制作前後の作業を手伝うことにしました。

展覧会オープンの数日前、あたり一面に散らばっている洗濯バサミがどのような作品になるのか、全く見当のつかないまま、私はコツコツとただ目の前の洗濯バサミを連結することだけに集中。それだけに、オープン当日、天井に届く程の高さとその周りに広がるカラフルな作品は、洗濯バサミだけで制作されたとはとても思えませんでした。

展覧会が終わった翌日、さっそく解体作業が始まり、夕方には作品は跡形もなくなってしまいました。

高本さんの作品は、展覧会のたびごとにコツコツと時間をかけて制作され、そして解体されていくのでしょうか。しかし、そのことが、かえって作品の姿を私達の心に鮮明に残していくのかもしれない。

今も高本さんの作品が、展示室出口の大理石に映り込んでいたのが忘れられません。

【鈴木典子】

